人文科学論集
2019, No. 98, 21－37

「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材の開発と検討

伊　藤　利　明
石　村　由利子

はじめに

生命の大切さは，特別の教科　道徳で学習する内容の一部である。子どもの生命の大切さに関連して，「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」が 2007（平成 19）年，熊本市に設置された。この施設は，家庭の事情で親が自分では育てられない子どもの生命を救うために設置されたが，当初から賛成と反対の意見があった。2017（平成 29）年には，神戸市に全国 2 番目の施設を設置するという動きがあり，「こうのとりのゆりかご」の存在が改めて問われることになった。「こうのとりのゆりかご」を学習することは，生命の大切さを考えることと深く結びついている。

このような「こうのとりのゆりかご」については，今まで道徳教材としてほとんど取り上げられていない。しかし，現代的で論争的な問題であり，中・高校生が将来直面する問題である。自らの生と性に関連するテーマであり，有意義な道徳教材になると考える。

本論文では，生命の尊さを理解するために，「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材を開発する。大学生を研究対象者とした模擬授業を実施し，開発した教材が中学生向けの教材として適切かどうかを検討する。そのため，第 1 に，問題の所在と目的を述べる。第 2 に，本研究の方法を明らかにする。研究対象者と手続き，倫理的配慮，読み物資料と学習指導案の作成の仕方を説明する。第 3 に，アンケート調査の結果を概観する。学習課題の達成の認識，中立性，配当学年を取り上げる。授業内容への提言と研究対象者の学びと感想を分析する。第 4 に，考察を加える。第 5 に，アンケート調査結果から導き出される結論を述べる。

1. 問題及び目的

1）問題の所在

（1）「こうのとりのゆりかご」を道徳教材として取り上げる理由

「こうのとりのゆりかご」を道徳教材として取り上げる理由は，4つある。第1に，「こうのとりのゆりかご」は生命の大切さを学習できる教材だからである。中学校学習指導要領「第3章特別の教科　道徳　第3 指導計画の作成と内容の取扱い　3」は教材の留意事項として，次のように説明している。

> 「(1) 生徒の発達の段階や特性，地域の実情等を考慮し，多様な教材の活用に努めること。特に，生命の尊厳，社会参画，自然，伝統と文化，先人の伝記，スポーツ，情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし，生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり，感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。」

活用する「多様な教材」の例として，「生命の尊厳」が最初に挙げられている。「こうのとりのゆりかご」は，この「生命の尊厳」と関連する課題のひとつとして位置付けられる。「こうのとりのゆりかご」は，子どもの生命を救うためのものか，子どもの生命を軽視しているのか。この問いを考えることは，生命の大切さを学習することである。

第2に，従来の道徳教育に対する批判に対応し，「考え，議論する道徳」を構築するためである。従来の道徳教育の在り方については，「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」（2017（平成28）年12月21日，中央教育審議会）が，課題を指摘している。すなわち，従来の道徳教育が「主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導」になっていること，「考え，議論する道徳」への質的転換が必要であることを指摘している。

「考え，議論する道徳」へ転換するためには，児童・生徒自身に考えさせ，道徳の問題を認識し解決策を発見させることが必須である。「こうのとりのゆりかご」の存在は，児童・生徒が自ら解決策を考えなければならない問題であり，読み物資料にも解決策は書かれていない。

第3に，「答えが一つではない」道徳の問題を取り上げるためである。さらに，答えが分からない又はまだ存在していない問題を取り上げることもある。従来の道徳の授業においては，児童・生徒は，取り上げた問題の答えを簡単に導き出すことができた。多くの児童・生徒は，教員の考える正解を先取りして答えていた。児童・生徒が問題を自分のものとして，深く考えることはしてこなかった。

たとえば，文部科学省，『私たちの道徳　中学校』[1] の中の「キミばあちゃんの椿」という教材では，「生命の尊さ」を学習する。読み物資料の内容は，病弱な祐介が広瀬淡窓

のことをキミばあちゃんから聞き，一生懸命に生きようとするという話である。広瀬淡窓は病弱であったけれども，倉重湊という医師の助言によって，塾に専念することになる。キミばあちゃんは，祐介にも広瀬淡窓の精神的な強さを学んでほしいと願っている。そして，祐介に万善簿を紹介する。万善簿は，良いことをした時には白丸を，悪い事をした時には黒丸を記入する帳面である。読み物資料の最後に，生徒が「感じたこと，考えたこと。」を書く欄を用意している。

「祐介は，キミばあちゃんの手をぐっと握りしめて，どんなことを考えているのだろう。」[(2)] という発問を投げかけても，生徒がじっくりと考えることを期待できない。人生の生き方について教師が期待する答えはひとつであり，これからしっかりと生きようと決心することである。生徒は，深く考えないで，答えを導き出すことができる。広瀬淡窓の生き方や万善簿は，見習うべきものであり，批判するものではない。キミばあちゃんの読み物資料では，「考え，議論する道徳」を実践できないのである。

「こうのとりのゆりかご」に関する質問の答えはひとつではないし，正解が複数考えられる問題である。たとえば，「こうのとりゆりかご」を増やすべきかに対する答えを手に入れるためには，児童・生徒がこうのとりのゆりかごの存在理由，メリットとデメリットを比較して考えなければならない。

第４に，現在話題になっている現代的な問題を取り上げるためである。先人の伝記のような教材は，現代の生活にどのように役立つかを考えて取り上げるべきである。現在進行中の問題については，歴史的な話題よりも現実味を持って受け止めることができる。

「こうのとりのゆりかご」は，2006（平成 18）年 12 月 15 日に熊本市の慈恵病院が設置の申請をした。熊本市の幸山政史市長は 2007（平成 19）年４月５日，設置を許可することを発表し，病院施設の変更許可証を交付した。「こうのとりのゆりかご」が設置されてから 10 年以上になるが，最初から賛成と反対の意見がみられた。毎年のように，預けられた子どもの人数が新聞等で報告されていた。

慈恵病院の看護部長であった田尻由貴子氏は，８年の間「こうのとりのゆりかご」に関わってきた。田尻氏は，2015（平成 27）年３月に退職した。その後，2016（平成 28）年に『はい。赤ちゃん相談室です。』[(3)] を，2017（平成 29）年には『「赤ちゃんポスト」は，それでも必要です。』[(4)] を出版している。田尻氏は，最初の著書から，「赤ちゃんポスト」という名称も用いている。

神戸市に全国２番目の「こうのとりのゆりかご」を設置しようとするというニュースは，新聞等でかなり大きく取り上げられた。こうのとりのゆりかごは比較的新しい話題であり，現在論争中の問題である。神戸市は医師が常駐しないという理由で，申請を認めなかったが，生徒に「こうのとりのゆりかご」について考えさせることは，生活していく中で実際に起きている問題を考えることになる。

（2）中学校学習指導要領の内容項目と「こうのとりのゆりかご」

中学校学習指導要領の道徳科の内容項目から「こうのとりのゆりかご」に関連する学習課題を取り上げると，①自主，自律，自由と責任，②家族愛，家庭生活の充実，③生命の尊さ，④よりよく生きる喜びが挙げられる。この中で最も関連が深いのは「生命の尊さ」であり，次のように説明されている。

「生命の尊さについて，その連続性や有限性なども含めて理解し，かけがえのない生命を尊重すること。」

「こうのとりのゆりかご」の教材では，子どもの「生命の尊さ」を取り扱い，ひとりひとりの子どもの「かけがえのない生命を尊重すること」を学習することを目指す。この「生命の尊さ」をはじめ，ねらいとして設定できる内容項目があり，道徳の模擬授業を実施することによって，研究対象者が学習課題を認識したかどうかを確認することにした。

（3）「こうのとりのゆりかご」と教科等の関連

「こうのとりのゆりかご」は，道徳科の内容項目と関連するだけではなく，道徳以外の教科とも関連している。中学校や高等学校では，保健体育と関連している。中学校学習指導要領第２章各教科　第７節保健体育　第２ 各学年の目標及び内容〔保健分野〕２内容（4）は，「イ 健康と環境に関する情報から課題を発見し，その解決に向けて思考し判断するとともに，それらを表現すること。」としている。「こうのとりのゆりかご」は，健康に関する課題のひとつとして位置付けられる。

たとえば，「新中学保健体育」[5] では，「保健編　１章心身の発達と心の健康　３生殖機能の成熟」において，思春期の体の変化を学び，受精と妊娠のメカニズムを理解する。妊娠は健康に関する話題であり，産まれた子どもをどのように育てるかにつながる話題である。

高等学校の保健体育は，さらに詳しく妊娠を取り扱い，出産後の健康的な環境づくりを取り上げている。「最新高等保健体育［改訂版］」[6] では，「保健編　２単元　生涯を通じる健康　３妊娠・出産と健康」において，母体の健康の維持や母子保健サービスを学習する。妊娠中や出産後の女性にはパートナーの支援が求められ，健康的な環境づくりが大切となる。

次に，「こうのとりのゆりかご」は，高等学校の「現代社会」や「社会福祉基礎」と関連している。「現代社会」[7] においては，「第２部　現代の社会と人間　第１章　青年期と自己形成の課題　１　現代社会と青年の生き方　１ 現代社会と青年」の中の「少子高齢化と人口減少社会」という項目で，「育児を行う社会環境の整備が不十分なこと，子育ての経済的負担の重さなど」が述べられている。さらに，「変化する現代社会に生きる」では，「現在の自分の家族が，これからどのような変遷をたどり，自分はどのような役割を果たすことになるのか。パートナーと暮らすのか。子どもを育てるのか，老後にどう備え

るのか」が，青年の課題として挙げられている。

「社会福祉基礎」[8] においては，「第３編生活を支える社会福祉・社会保障制度　第２章子ども家庭福祉　８子どもの権利と子ども家庭福祉」で，子どもを人間として取り扱うことが述べられ，児童憲章における子どもの人権の大切さが説明されている。児童の権利に関する条約が国際連合で採択され，日本も 1994（平成６）年に批准した。この条約には，保護者の養育の尊重（第５条）や保護者と分離されない権利（第９条）などが含まれている。

「こうのとりのゆりかご」に関しては，出自を知る権利が問題となっている。第７条では，「児童は，（中略）できる限りその父母を知りかつその父母によって養育される権利を有する」とされている。

このように，「こうのとりのゆりかご」は道徳教育だけではなく，保健体育などの教科と密接に関連している。「こうのとりのゆりかご」を増やすかどうかという問題を考えることは，教科横断的な学習をし「探究的な学習」をすることになる。この意味では，「こうのとりのゆりかご」は総合的な学習の時間の教材となる。中学校学習指導要領「第４章総合的な学習の時間　第１目標」は，次のように述べている。

「探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（1）探究的な学習の過程において，課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け，課題に関わる概念を形成し，探究的な学習のよさを理解するようにする。

（2）実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようにする。

（3）探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，積極的に社会に参画しようとする態度を養う。」

総合的な学習の時間は，問題の解決策を児童・生徒が自ら考え探究することを目指している。「こうのとりのゆりかご」の問題も「探究的な学習」のひとつとして位置付けることができ，児童・生徒に考えさせる教材となる。

このように，「こうのとりのゆりかご」は保健体育などの教科や総合的な学習の時間と関連している。ここから，「こうのとりのゆりかご」は中学校や高等学校で取り扱うことがふさわしい教材であると言える。

2）本研究の目的

本研究の目的は，「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材を開発し，中学３年生向けの教材としての適切性を検討することである。

2. 本研究の方法

1）研究対象者と手続き

研究対象者は，A大学の健康福祉学部健康科学科・福祉栄養学科，社会福祉学部社会福祉学科等に所属する在学生を対象とした。

教職科目「道徳教育論」「公民科指導法」で模擬授業を実施し，終了時に自記式質問紙調査を実施した。実施時期は，2017（平成29）年12月19日（火）と20日（水）である。

2）倫理的配慮

事前に，学内の研究倫理委員会による承認を得た（承認番号は17－44）。模擬授業の開始前に，研究の目的・意義，方法，倫理的配慮について口頭および研究説明書，調査用紙を用いて大学生に説明し，同意書を配布した。研究への参加は本人の自由意思によるものであること，参加しない場合でも学業成績や単位取得等に不利益を被ることは一切ないことを保証した。同意書はその場で署名してもらい，回収した。

3）読み物資料と学習指導案の作成

「こうのとりのゆりかご」を題材にした読み物資料を開発し検討するために，看護学の知見を活用・融合して読み物資料の試案を創作した。読み物資料を用いた授業のために，アクティブ・ラーニングの方法を取り入れた学習指導案を作成した。学習指導案は中学校3年生を想定して作成した。この学習指導案に基づいて，大学生を対象として，道徳の授業を実施した。授業終了後に，アンケート調査を実施し，「こうのとりのゆりかご」の道徳教材に対する大学生の意見を聞き，道徳教材としての適切性を検討する材料とした。

学習指導案では，家族とは何かから始めて，こうのとりのゆりかごの設置理由，メリットとデメリット，神戸市に設置することに対する賛成と反対の意見，預けられた子どもの気持ちを考えさせるようにした。意見を発表しやすい雰囲気づくりを目指すことに配慮した。

（1）読み物資料の作成

読み物資料を作成するときに，問題状況を意図的に設定した。第1に，多様な家族を設定し，現実の状況を理解できるようにした。母子家庭や父子家庭の単身世帯があり，中には里親家庭もあり得る。祖父母との同居については，その割合が減っているが，広い意味の家族構成を考えて，同居しているとした。

第2に，主人公は中学3年生とした。その理由は，既に述べたように，生徒の発達段

階を考え，妊娠の可能性が高まる高校よりも前に学習するのが良いと考えたからである。また，保健体育などの他教科の学習内容や進度を考慮して，この学年なら理解できるだろうと予想したからである。

第３に，子どもを預ける理由として，主として経済的理由を取り上げ，生徒にその解決策を考えさせることにした。乳幼児を預ける理由は，生活困窮，未婚，不倫，世間体・戸籍，パートナーの問題などであるが，性教育で取り扱うのが適切だと考えられる問題は避けた。

第４に，中学校学習指導要領における複数の内容項目と関連付けることを考えた。既に述べたように，「生命の尊さ」をはじめとする４つの内容項目に対応した質問項目を用意した。

（2）読み物資料の概要

読み物資料の概要は，次の通りである。

「主人公は，中学３年生。名前は，由美子という。家族は，母，弟，おじいちゃんとおばあちゃんである。何でも話せる友だちの京子の両親は，里親だと聞かされた。里親は愛情を持って育ててくれるので感謝しているが，京子は自分を産んでくれた母親にも会ってみたいと思っている。

母親と一緒にテレビを見ていると，神戸市で全国２番目の「こうのとりのゆりかご」を作る計画があるが，医師がいないという理由で，設置が延期されているというニュースが流れていた。母親との会話の中で，最初に熊本の慈恵病院が子どもの命を救うために設置したこと，経済的理由で子どもを預ける親が多いこと，育児をしないで預ける親が増えるという批判があること，預けられた子どもの何人かは里親に引き取られたり，養子になったりしていることなどを知った。

母親との会話の後に，養子縁組について調べた。特別養子縁組は，実の親との家族関係をなくして，新たに親子になることである。預けられた子どもも，親の名前を知りたいのではないかと思う。」

（3）学習指導案の作成（資料１）

学習指導案に記載する目標は，次の４つである。

①家族とは何かを考え，言葉で表現できる。

②「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもを通して生命の尊さを知る。その設置理由を理解し，子どもの生命を守るための施設であることを理解する。

③神戸市に「こうのとりのゆりかご」を設置すべきかどうかを多面的・多角的に判断し，グループ・ディスカッションを通して，他の生徒と議論し，自分の意見を述べることができる。

④家族を大切にすることに関心を持ち，生命を守り，大切にしようとする態度を持つことができる。

次に，主な学習活動として，次の内容を取り上げる。

1 家族の大切さを確認する。

2 読み物資料の内容を理解する。

①「こうのとりのゆりかご」の設置理由を考える。

②赤ちゃんを預ける理由を考え，その解決策を考える。

③「こうのとりのゆりかご」に対する批判を考える。

3 グループに分かれて，神戸市に「こうのとりのゆりかご」を設置すべきかについて話し合いをする。

4 グループで話し合ったことをクラスで発表する。

5 預けられた赤ちゃんの立場になる

①赤ちゃんの気持ちになる。

②親の名前を知りたいと言ったとき，どう答えるか。

3. 結果

1）研究対象者の概要

模擬授業の研究対象者71名に対して無記名自記式質問紙を配布し，全員から回答を得た。いずれも回答に欠損がなく，71部（有効回答率100%）を分析対象とした。

研究対象者の所属学科，学年は，健康科学科2・3年次生55人，福祉栄養学科2年次生3人，社会福祉学科2・3年次生12人，臨床心理学科4年次生1人で，2年次生64人，3年次生6人，4年次生1人だった。性別は女子が53人，男子が18人だった。

2）学習課題達成の認識について

中学校学習指導要領の道徳科の内容項目から「こうのとりのゆりかご」に関連する学習課題を4つ取り上げた。模擬授業の研究対象者が学習課題を認識したかどうかを確認するため，これらの項目について，それぞれ達成できるものであったか否かを尋ねた。「いいえ」「どちらでもない」と回答した場合はその理由を記述してもらった。（表1）

①学習課題1：「生命の尊さ」を学ぶ。

「生命の尊さ」を学ぶという課題を達成できる教材だったかについて，1人を除いて「はい」と答えた（98.6%）。「いいえ」と答えた1人は，「家族との関係がテーマだと思うから」と回答した。他方，「生命の尊さ」について深く考えることのできる教材だったかについては70人（98.6%）が「はい」と答えた。「どちらでもない」1人は，「テーマに当てはまるかわからないから」と回答した。

表１　学習課題の達成に関する認識について

人（%）

質問項目	はい	いいえ	どちらでもない
人間尊重の精神にそっていたと思いますか	71（100.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）
「生命の尊さを学ぶ」というねらいを達成できる教材でしたか	70（ 98.6）	1（ 1.4）	0（ 0.0）
「生命の尊さ」について深く考えることのできるものでしたか	70（ 98.6）	0（ 0.0）	1（ 1.4）
「自主，自律，自由と責任」について深く考えることのできるものでしたか	67（ 94.4）	0（ 0.0）	4（ 5.6）
「家族愛，家庭生活の充実」について深く考えることのできるものでしたか	66（ 93.0）	2（ 2.8）	3（ 4.2）
「人間としてよりよく生きる喜びや勇気」を与えられるものでしたか	58（ 81.7）	4（ 5.6）	8（11.3）

②学習課題２：「自主，自律，自由と責任」について深く考えることができる。

この課題を達成できる教材であったと回答したものは67人（94.4%）だった。「どちらでもない」と答えた４人（5.6%）からは「自身がその立場に立って考えていないため，他人ごとだと考えている」「自由と責任には関連するが，自主・自律との関連が見られなかった」などの意見があった。

③学習課題３：「家族愛，家庭生活の充実」について深く考えることができる。

この課題を達成できる教材であったと回答したものは66人（93.0%）だった。「いいえ」または「どちらでもない」と応えた５人（7.0%）からは「授業を受けて感じなかったため」「家庭生活については触れていなかった」との指摘があり，「生命の尊さ」に焦点が当てられていたとの回答があった。

④学習課題４：「人間としてよりよく生きる喜びや勇気」を与えられる。

この課題を達成できる教材であったと回答したのは58人（81.7%）だった。「いいえ」４人（5.6%），「どちらでもない」８人（11.3%），「無答」１人（1.4%）の13人（18.3%）からは「この内容は勇気については関係ないと思う」「預けられた子どもや預けた親の気持ちを考えて，よりよく生きる喜びは与えられるかもしれないが，勇気は与えられないと思う」「子どもを焦点とすると生きる喜びは預けられている時点で少ないと思うから」との意見があった。

3）教材としての適切性について

（1）道徳教材としての中立性について

読み物資料では，「こうのとりのゆりかご」に子どもを預けることを肯定または否定のどちらも記載しなかった。むしろ，「こうのとりのゆりかご」の設置理由や子どもを預ける家庭の事情とその解決策を考えさせるようにした。さらに，「こうのとりのゆりかご」

のメリットやデメリットを理解した上で，神戸市に設置すべきかどうかを考えさせた。

「この教材は，特定の見方や考え方に偏った取り扱いはなされていないものでしたか」の質問については，「はい」が68人（95.8%）で，「いいえ」1人（1.4%），「どちらでもない」2人（2.8%）であった。「こうのとりのゆりかご」自体の良し悪しによって教材に対する考え方が偏ってしまうのではないかとの危惧を示したものが1名いた。このことから，教材の中立性は担保されたものだったと言える。

（2）学習者の発達段階をふまえた配当学年の判断について

学習者の発達段階を考慮した時，中学3年生の教材として適切かという質問に対して57人（80.3%）が「はい」と答え，「いいえ」が3人（4.2%），「どちらでもない」が11人（15.5%）であった。しかし，「この教材は発達段階から見てどの学年が適切だと思いますか」と質問を変えてみると，中学3年生を適当であるとした57人中，中学3年生と回答したのは17人（29.8%）であった（図1）。中学1年，2年生での学習が良いと判断したものが13人（22.8%）おり，中学生の教材として適切であるとの回答は30人（52.7%）になった。一方，中学3年生でもよいが，高校生の方が適しているとの意見を示したものは21人（36.8%）であった。中学・高校の両方にわたる複数学年を回答したものが6人（10.5%）いたが，中学校および高校では教えるべきではないとする者はいなかった。

それぞれの学年を選んだ理由を尋ね，回答を抜粋し要約して示した（表2）。妊娠，出産に加え，子育て，棄児などの問題に対して，広く理解できる年齢であるどうかの判断が配当学年を決める根拠になっていることが示された。また，研究対象者が，中学生でも妊娠の可能性があること，高校生が親になる可能性があることをふまえ，なるべく早くこの

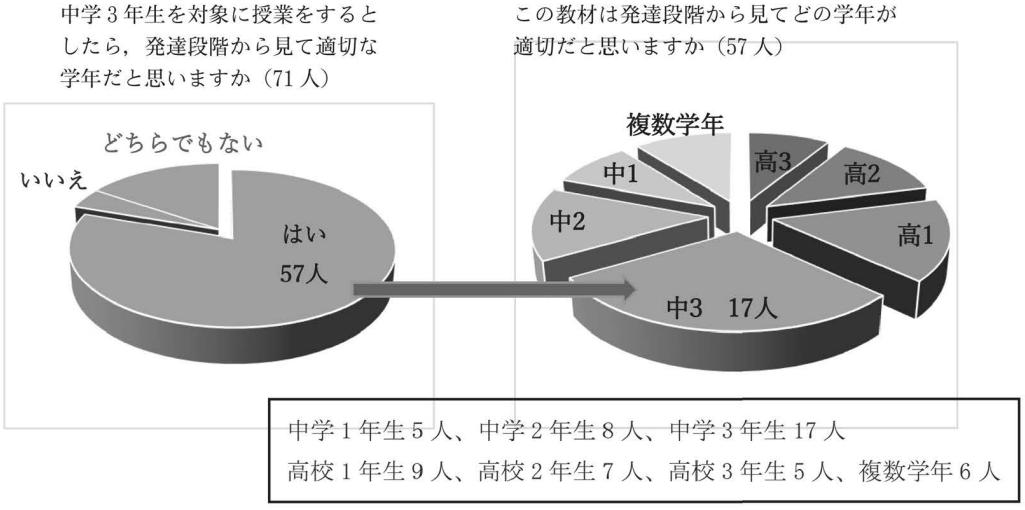

図1　学習者の発達段階をふまえた配当学年の判断

表２「こうのとりのゆりかご」を取り上げるのに適切な学年とその理由

適切な学年	適切であると思った理由
中学１年生	・分かりやすいし，中１なら分かると思うため ・妊娠の低年齢化が指摘されているので，できるだけ早い段階でこういうことを考えるきっかけがあると良いと思ったから ・友人関係，家族関係が様々な影響を中学１年生ぐらいから受けやすくなると思うから ・思春期の始まりに「母親」の大切さ，自分が生かされていることを知るべき
中学２年生	・中２くらいから命について身近に考えられると思う ・性に関して興味がある年頃だと思うし，命の大切さを学ぶ（考える）必要があると思うから ・第二次性徴や性教育の開始に合わせて，新しい生命ができることの重さを知るべきだから ・育てられない年齢というのも考えてほしいから ・家族の関係など，分かってくる時期だから
中学３年生	・中学１年生ではまだ難しいだろうが，３年生ぐらいなら知っておくべきことだと思う ・女子は体が成長して子どもを産める体になる。男子はしっかり責任をもって行動しなければならないことをわかってもらうため ・性のことも学び，これから高校に進学したり社会に出たりして，今までよりももっと多くの人と関わるため，そんな家庭もあると知っておくべきだと思ったから ・子どもを作る前に子どもを生むことや子どもの気持ちを考えることで命について考える。中学３年生ごろにはしっかり分かるくらいになっているかなと感じたため
高校１年生	・中学生には難しいと考えたから。中学生では少し重く早いと思う ・資料に登場した生徒が知らない言葉が多かったから ・高校生ぐらいが子どもについて考えられると思うから ・中学生で妊娠することは高校生より確率が低いと思ったので，高校でするべきだと思った ・生命の誕生について責任を考える必要があるため
高校２年生	・高校２年生だとある程度の理解をもって，取り組むことができると考えるから ・親の大切さについて学べる時期だから ・内容を深く考えなくてはならないものだから ・自分が子どもを産むということに対し，現実的になっているため ・少し難しい，いじめにつながらないかも見る必要がある。もし，養子の生徒の場合，中学生という複雑で難しい時期に受け止められるのか心配だから
高校３年生	・妊娠・出産の可能性が出てくる年齢で，命について考えをもち，賛成も反対も考えられるから。中２以下では現実視できないのではないか ・かなり難しい内容だと思ったから。命の重さについてしっかり考えられると思うから ・中学でシングルマザーになる生徒もいると思うので，敏感になる時期に教える，考えさせるべきであると思う ・こういった養子の話は早めに伝えといた方がいいと思ったから

ような問題について考える機会を持つべきと考えていることが記述された。

学年に合わせて情報量や発問を変えたらいいから，どの学年でも大丈夫だと思うとの回答もあった。

4）授業内容への提言

（1）教師が配慮すること

授業をするとき，教師がどのような配慮が必要か尋ねた。中学生・高校生にとって「分かりやすい言葉で話す」ことに加え，「こうのとりのゆりかご」に子どもを預ける親は「さまざまな事情があるので，かたよりのないように話すこと」が大切であること，「様々

な視点や事例に触れて多様な考え方を促すこと」が必要であると回答していた。「預ける親にも理由があること，子どもに責任はないことなど」をふまえた授業であることや，「里親や養子縁組の親に育ててもらっている子もいると思うから，そこは気をつけるべき」だと回答していた。

（2）教材の改善すべき点

今回作成した「こうのとりのゆりかご」の教材について，改善した方が良い個所を尋ねた。子どもを預ける理由が「経済的理由に偏りがちだから，他の理由も考えた方が意見の幅が広がると思う」との指摘があった。また，「こうのとりのゆりかご」に預けられた人のその後をもう少し詳しく教えてほしかった」との意見があり，「子どもをこうのとりのゆりかごに預けることがマイナスなイメージで止まってしまうとあまりよくないと思った」と指摘があった。

授業の方法について，「1時間でおさめず，2週に分けてしたり，2時間分にしてみたりするのもいいと思う」との意見があった。また，「発言が多いクラスならディベートにする，映像やインタビューを載せる」などの提言があった。

5）研究対象者自身の学びと感想

研究対象者自身にとって，この教材は「考えさせられる授業であった」「親の責任や家族という形について改めて考えさせられた教材だった」と肯定的な意見が多かった。また，「この『赤ちゃんポスト』ができざるを得ない現状を知ることができ，生命に対する責任を考える機会を与えられたので良かった」「自分には関係ないことだと思わず，もし，将来子どもを授かったときのことを考えられたのですごくよかった」「里親について知ることで知識が広がり，自分が幸せな家庭で恵まれていると認識でき，感謝の気持ちが生まれると思う」などと身近な問題として真剣に考えていた。

道徳教材としての読み物資料について，思春期にある中学・高校生の「発達段階に合っていた教材だった」と評価し，この年代の生徒にとって「難しいが命や親になるということを考えるには良い教材である」と考えていた。

「賛成も反対もどちらも考えることで偏った意見を持つことを避けると良いと思う」との回答があり，「答えが一つではない」問題を考える学習活動が期待できる教材になっていた。

4. 考察

1）学習課題の達成について

道徳の授業は生徒の思考を期待される解答に導くことではなく，生徒が問題を自分のも

のとして受け止め，多面的・多角的に考える態度を養い，よりよい生活に発展させていく力を身につけることが期待されるものである。生徒自身が「考え，議論する道徳」の授業を構築するために，学習指導案にグループ・ディスカッションを取り入れた。「こうのとりのゆりかご」の設置理由を知り，設置の可否を話し合うことやこの施設によって救われた子どもの存在を知ることを通して４つの学習課題について学ぶことを目指した。

「生命の尊さ」は学習課題としておおむね適切であると確認された。「こうのとりのゆりかご」が子どもの生命を守ることを目的とした施設であり，４つの学習課題の中でも最もわかりやすいものであったと推測できる。

次に，「自主，自律，自由と責任」については，母親が子どもを預けるかどうかは，母親の「自由と責任」と深い関連がある。わが子を「こうのとりのゆりかご」に預ける「自由」があると同時に，育てていく「義務」を持っているという視点が大切である。「こうのとりのゆりかご」の読み物資料では，母親の「自由」については積極的に取り上げなかった。わが子を預けることが自主性や自律性に従うことと勘違いされては困るからである。また，子どもを自由に預けることも奨励しないからである。子どもを施設に預けることを権利として考えることは望ましくない。この読み物資料から，子どもを預ける自由や権利を明言化し批判するには至らなかったが，「自主，自律，自由と責任」については約 95% が読み取れていた。

「家族愛，家庭生活の充実」との関連について，71 人中５人（6.8%）が適切としなかった。模擬授業では，導入部分で家族について考えさせ，「家族愛」の大切さを理解させようとした。子どもを家族の中で育てることの大切さを学んでほしいと考えた。「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもも家族的な雰囲気の中で育てられることが大切である。しかし，一部の研究対象者は，「こうのとりのゆりかご」に子どもを預けることと家族愛を結び付けて考えなかったと推測できる。「家族」が生みの親に偏ることなく，里親などの存在に目を向ける広がりを持たせることも必要と思われた。

「人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるもの」かどうかについては，「いいえ」と「どちらでもない」を合わせると，13 人（18.3%）が学習課題に合致すると考えなかった。

「こうのとりのゆりかご」の存在によって，授かった子どもを育てられない事情がある親から育ててくれる親に託し，命をつないでいくことを，田尻氏は「命のバトン」と表現している[9]。預けられた子どもにも生きていることの喜びを感じることができる環境が提供されることが望ましいのはいうまでもない。授業のまとめでは，実の親であれ，里親や養子縁組をした家族であれ，児童養護施設であれ，子どもは家庭的な雰囲気で育てられるのが良いとだけ教師が伝えた。読み物資料の主人公は養子縁組制度や里親制度について調べたり，友人の話を聞いたりして，親の責任や家族というものを改めて考えさせられたとしている。しかし，預けられた子どもが新しい家族を得て，ともに生きる姿をイメージで

きる内容を加えることで，学習者にこの学習課題を明確に意識づけられるかもしれないと考えた。

2）配当学年について

生徒の発達段階から判断すると，中学３年生向けとしたことは適切であったと結論づけられた。高校生は身体が成熟し，妊娠・出産ができるようになるので，その前に学習するのが良いと考えられている。文部科学省の調査によれば，2015（平成27）～16（平成28）年度に公立高校が把握した妊娠は2098件で，うち３割（642件）が自主退学していた[10]。

高校生については，望まない妊娠の割合ははっきり特定できないが，学業との両立が困難である状況は理解できる。高校生の妊娠の中に望まない妊娠が含まれているのであれば，安易に人工妊娠中絶を選択するだけではなく，中学校で「こうのとりのゆりかご」を取り上げ，その存在を知り，養子縁組や里親という選択肢があることを学習し，知識としてもっていることも必要なのではないかと考える。

道徳教育では，教材の事例を自分の立場に置き換えて，自分ならどうするかを考えることは大切なことである。「こうのとりのゆりかご」に子どもを預けた母親の気持ち，将来事実を知った子どもの気持ちを察する心を育むことも求められる。しかし，「どういう気持ちで『こうのとりのゆりかご』にわが子を預けると思いますか？」，「自分が親で，何らかの理由で子どもを育てられないとしたら，あなたは『こうのとりのゆりかご』へ預けますか？」，という主旨の質問は模擬授業では用いなかった。その理由は，未婚で子どもを産むことを肯定してはいけないと思ったからである。また，中学生が予期しない妊娠をすることが当たり前だと受け止めてほしくないとも思ったからである。中学生には重い問題なのではないかという意見があったが，「望まない妊娠」は保健体育，性教育と連動しながら教科横断的に学ぶ問題であると考える。当事者の立場になって考えることを，この教材ではどのように提示していくことができるか，さらなる検討が必要と思われた。

3）今後の課題

今後の課題として，次の２つを指摘できる。

①子どもは生活を共にする人々（家族）の中で育つことを考えさせる。

②読み物資料および発問を吟味する。

今回の読み物資料で改善した方が良い個所として，子どもを預ける理由が経済的理由に偏っているとの指摘があった。しかし，実際に子どもを「こうのとりのゆりかご」に預ける理由には未婚，不倫などもあるが，中学・高校の授業では取り上げることは難しい。性教育で取り上げるか，道徳教育の内容として取り上げるかを，改めて考えたい。

5. 結論

以上のことから，次の４点が確認された。

①「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材は，内容項目のうち，中心とした「生命の尊さ」および「自主，自律，自由と責任」について深く考えることができる教材であると言える。

②「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材については，「家族愛，家庭生活の充実」について考えることができる教材と認識されているものの，十分とは言えなかった。

③「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材については，「人間としてよりよく生きる喜びや勇気」を与えられるものとしては不十分だと感じている。

④「こうのとりのゆりかご」を題材にした道徳教材は，中学３年生の発達段階に照らして，適切な題材になり得ると思われた。

＊本論文は，2017 年度 JSPS 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金），基盤研究（C），課題番号 17K04895「アクティブ・ラーニングを用いた道徳教材の開発と評価方法に関する研究」，2016 年度基盤研究（C），課題番号 16K03243「現行学校教育における『伝統文化』の分析及び活用の可能性についての総合的研究」（研究代表者：高木史人）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

⑴　文部科学省，『わたしたちの道徳　中学校』（廣済堂あかつき，2014 年）108～113 ページ。

⑵　文部科学省，『中学校道徳　読み物資料集』（廣済堂あかつき，2015 年）93 ページ。

⑶　田尻由貴子，『はい。赤ちゃん相談室です。』（ミネルヴァ書房，2016 年，2017 年）

⑷　田尻由貴子，『「赤ちゃんポスト」は，それでも必要です。』（ミネルヴァ書房，2017 年）

⑸　文部科学省，『新中学保健体育』（学研，2017 年）14～17 ページ。

⑹　文部科学省，『最新高等保健体育［改訂版］』（大修館，2017 年）68～69 ページ。

⑺　文部科学省，『現代社会』（東京書籍，2017 年）32～33 ページ。

⑻　文部科学省，『社会福祉基礎』（実教出版，2017 年）92～93 ページ。

⑼　田尻由貴子，『はい。赤ちゃん相談室です。』前掲書，134 ページ。

⑽　毎日新聞，「妊娠 高校自主退学３割　貧困の連鎖懸念も　文科省調査」
https://mainichi.jp/articles/20180331/ddm/041/100/036000c　（毎日新聞，2018（平成 30）年３月 31 日　東京朝刊），（2018（平成 30）年 11 月 29 日閲覧）

資料1　学習指導案

平成29年12月○○日（○）
健康福祉学部・社会福祉学部
○○人
指導者　伊藤利明

1　主題名　「こうのとりのゆりかご」を学ぶことにより，命の尊さを知る。（中学3年生対象）
2　教材　「こうのとりのゆりかご」に関する自作資料
3　単元設定の理由
①教材観
生きているものには，すべて生命が宿っている。人間をはじめとする動物や植物も，命を持っている。小学校から高校まで，動物や植物の命を大切にすべことは，学習してきた。自分の価値を認める自己肯定感を持つことが生徒の精神的な成長にとって必要であり，他者の命を尊ぶことも社会性の習得にとって必要である。
子どもの生命を救う方法のひとつとして「こうのとりのゆりかご」がある。熊本市の慈恵病院に設置された「こうのとりのゆりかご」は，自分で育てられない母親の最終的な駆け込み寺となっている。一方で子どもの生命を救うが，他方で子どもを遺棄することを助長するという批判もある。「こうのとりのゆりかご」のメリットとデメリットを比較することを通して，生命の尊さを考えてみたい。
②生徒観
生徒は「保健体育」などの授業で生命の誕生などに関心を持ち，生命を尊ぶ態度を身につけている。しかし，履修者は生命の大切さを知ってはいるが，理念的な理解にとどまっている。現実的な生命の問題を自分で主体的に考え，自分で判断する機会には恵まれていない。「こうのとりのゆりかご」の設置理由などを学ぶことにより，子どもを持つことや育てることの大切さを考えてほしい。
③指導観
「こうのとりのゆりかご」を題材にして，生命の尊さを学んでほしい。「こうのとりのゆりかご」に子どもを預けるかどうかを他人事ではなく，自分事として考えることが重要である。グループ・ワークを通して他の生徒と議論し，意欲的に自分の考えを深めることが望ましい。生徒は子どもを持つ母親の立場になり，母親としての役割や子育ての大切さに気づいてほしい。預けられた子どもの立場も考え，生徒が多面的・多角的な思考を深めることを目指している。

4　目標
①家族とは何かを考え，言葉で表現できる。
②「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもを通して生命の尊さを知る。その設置理由を理解し，子どもの生命を守るための施設であることを理解する。
③神戸市に「こうのとりのゆりかご」を設置すべきかどうかを多面的・多角的に判断し，グループ・

ディスカッションを通して，他の生徒と議論し，自分の意見を述べることができる。

④家族を大切にすることに関心を持ち，生命を守り，大切にしようとする態度を持つことができる。

5 指導過程

過程	時間	主な学習活動	教師の支援
挿入	5分	1．本時の学習の目当てである家族の大切さを確認する。 ・「家族とは，○○である。」の中の○○に適切な言葉を入れる。 2．本時の学習の進め方，読み物資料を読み，その内容を理解する。	家族とは何かを考えさせるために，○○に当てはまる単語や語句を考えさせる。 複数の候補を考えるように指示をする。 読み物資料を配布する。 難しい言葉を説明する。
展開	40分	①「こうのとりのゆりかご」の設置理由を考える。 ②「こうのとりのゆりかご」に乳幼児を預ける家庭の事情を考え，経済的理由の解決策はないかを考える。 ③「こうのとりのゆりかご」に対するメリットとデメリットを考える 3．グループに分かれて，神戸市に「こうのとりのゆりかご」を作るべきかを話し合う。 4．グループで話し合ったことをクラスで発表する。 5．預けられた乳幼児の立場になる。 ①預けられた時の乳幼児の気持ちを考えてみよう。 ②乳幼児が成長し，親の名前などを知りたいと主張したら，どう答えるかを考える。	読み物資料から，設置理由を考えさせる。 ノートに解決策を書く時間を与える。 数名の生徒を指名し，解決策を発表させる。 読み物資料から考えさせる。 4〜5人のグループを作り，司会，発表者，記録係をあらかじめ決めておくように指示を与える。 発表する時間を調整し，代表的な意見を発言させるのも良い。 立場を変えることにより，多面的・多角的な思考を促す。預けられた子どもの立場になり，気持ちを推測させる。 子どもの権利条約第7条第1項が，乳幼児の出自を知る権利を規定していることを説明した後に，答えを考えさせる。
終末	5分	家族と生命の大切さについて，学習のまとめをする。 ・「こうのとりのゆりかご」に預けるだけでなく，子育てに悩む親が相談できる窓口や支援のネットワークが大切だと理解する。 ・「こうのとりのゆりかご」に預けられた乳幼児のその後について推測し，家族のあり方，子どもがよりよく生きることを支援する制度について確認する。	各自で学習したことをノートにまとめさせる。 「こうのとりのゆりかご」が必要かどうかだけではなく，親が子育てについて相談しやすくする方法も考えさせる。 特別養子縁組や里親制度を活用して家族を作ることが，子どもの幸せをもたらすこと，児童養護施設も家族的雰囲気が大切なことだと理解させる。

（伊藤　利明：名古屋経済大学名誉教授
関西福祉科学大学教授・道徳教育）
（石村由利子：元愛知県立大学教授・母性看護学）